

ない。一つの出来事は、多義的に解釈されうる。そして、その解釈は、その人が生きる日常においてどのようなスタンスに立っているかによって異なってくるだろう。時間にしたら本当にわずかな流れの中での出来事であったが、浅海先生のお人柄を凝縮して示しているようで、これからも心に残ることであろう。

これからは、先生のご健康とこれまでやれなかったことに打ち込んで下さることを祈るとともに、長いあいだに渡って先生が、地理学教室で果たしてくださった役割を少しでも果たすように努めることが、後に行く一人としての仕事であろうと思っている。

もういくつ寝ると……

久保幸夫

これを書いているいま、あと4000日で21世紀になる。なにか遠い将来のような気がしていた21世紀が目前になった気がする。

昨年のいくつかの出来事は、確実にある時代が終わりつつあるという証左であった。東西冷戦の終焉、東欧のドラスティックな変化は、戦後政治体制の終結ということだけでなく、近代社会がいよいよ幕を閉じようとしているということを印象づけた。工業社会であるところの近代社会において、マルクスは労働の疎外を述べ社会主義を提唱したが、近代社会そのものが次の社会（ポストモダン、ネオモダン、情報社会などと今のところ呼ばれているらしい）に変わりつつある現在、社会主義が変質を遂げねばならないのは自明の理であるだろう。

1980年代のキーワードは、「情報化」、「国際化」、「高齢化」であった。この3つのキーワードは基本的には社会の移行を意味するものだ。なによりそれぞれに「化」という変遷を示す文字が付けられている。情報化も個別の機械のレベルでは1980年代にかなり進展したが、ネットワーク、データの面ではまだまだである。情報化に伴い、さまざまなデレギュレーションが必要であるが、日本ではこれに逆行する政策がとられた。このことは、1980年代において情報の偏在、集中をうんだ。また、国際化も1980年代前半の「モノ」から「ヒト」へ進んだが、さまざまなコンフリクトを

まだ生じている。高齢化は、前近代社会の「多産多死」から「多産少死」をへて「少産少死」に至る過程での問題であった。

さて、1990年代のキーワードは何だろう。1990年代には、情報社会がほぼ完成するだろう。このため、まだ完全ではない情報社会のインフラストラクチャの整備が課題となってゆく。同時に移行期において発生する矛盾の解消が大きなテーマになる。「ネットワーク」、「地球化」、「環境」などがキーワードになるのではないか。だが、これも、過渡期のキーワードに過ぎない。問題は、21世紀になって形成されるだろう新しい社会システムがいったいどのようなもので、そこにおける価値基準や理論体系がどうなるかだ。

地理学にとっての問題は、現在のこの大きな社会変動をどうやってとらえていくか、ということと、これからの社会に対応して地理学そのものをどのように変えていくか、ということにある。リッター、フンボルトに始まる近代地理学自体、近代社会、そこにおける近代科学というフレームの中で登場してきた。したがって、社会が変化している状況の中で、いままでの地理学の概念や枠組に固執すれば地理学の衰退は目に見えている。

21世紀の地理学の(もう、その時には地理学とは呼ばれないかもしれないが)枠組を作る作業は、もう始めなければならない時期を過ぎたと思う。いったい誰が近代地理学の首に鈴をつけるのか。